



長野川の図鑑

長野川でみられる淡水魚たち



長野川中流域の風景

はじめに

この図鑑は、長野川にすむ魚たちの魅力を、より多くの人に伝えることを目的に作成されました。この図鑑を作成した九州大学流域システム工学研究室では、長野川に生息する魚類の調査を河口近くから上流部にわたって行い、魚類の分布状況と川の環境の関係について調べてきました。この図鑑に掲載されている写真は、その調査の中で撮影されたもののうち、魚たちの魅力や特徴がなるべくわかりやすく伝わるようなものを選んで掲載しています。また、普通に川に生息していても見つけることや捕まえることが難しかったりして、普段はなかなか手に取って見ることの少ない魚も多く掲載されています。あるいは、よく知られている魚でも、その特徴が鮮明にわかるように工夫しています。色鮮やかな写真や躍動感のある写真も掲載されており、魚に興味がある人もそうでない人も楽しめるようになっていきます。是非一度手に取ってご覧ください。そして、是非この図鑑を手にも長野川に出かけてみてください。きっと新しい発見やわくわくがあると思います。

この図鑑が長野川の魅力の再発見につながり、長野川が地域の人からも愛される「宝の川」として大切にされる一助となれば幸いです。

九州大学大学院工学研究院 林 博徳
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター 鹿野 雄一



調査時の様子

写真は、長野川での魚類の調査時の様子です。九州大学の調査では、電気ショッカーや投網、たも網等の漁具を用いて魚を採捕しました（※特別な許可を得て使用しています）。採れた魚は、弱らないうちに素早く写真撮影をしてデータに記録したのち、すみやかに放流しています。撮影している魚はもちろん生きていますので、ピントがぶれないように撮影するのがとても難しいです。

なお、思っていた以上に、長野川の環境は変化に富んでおり、流量も多い印象でした。水深が深いところでは2m以上のところもあるので、川に入る際には十分な安全対策が必要です。特に子どもたちについては、川に入って遊ぶ際には安全な場所を選ぶことはもちろん、ライフジャケットの着用や安全知識の教育啓発などの取り組みが不可欠です。



ヤマメ (学名 : *Oncorhynchus masou masou*)

河川の上流域の渓流に生息する。長野川に生息する魚の中では最も上流に分布する魚であり、白糸の滝ではレジャーの一環としてのヤマメ釣りも有名である。塩焼きなどにして食され、商用魚としても重宝されている。



タカハヤ (学名 : *Rhynchocypris oxycephalus jouyi*)

河川の上流域～中流域に生息し、淵やよどみなど比較的流れの緩やかな環境を好む。長野川においても上流部～中流部にかけて分布している。他の魚との生息域の比較ではヤマメより下流でカワムツより上流にあたる環境に多く確認される。後述のカワムツやオイカワ等とまとめて、九州では「ハヤ」や「ハエ」等と呼ばれる。



オイカワ (学名：Zacco platypus)

カワムツ等とともに”ハヤ”とよばれ、古くから食用としても親しまれている。塩焼きや甘露煮などにして食べるととてもおいしい。河川の中下流部に広く生息しており、長野川では河口付近から長糸付近まで普通に見られる。繁殖期のオス(写真)は体色が青緑色を呈し、とても美しい。



カワムツ (学名：Nipponocypris temminckii)

オイカワ同様に”ハヤ”と呼ばれる。河川の中上流部に広く生息しており、オイカワと比べると少し上流側に生息する。長野川では中流から白糸の滝あたりの上流まで普通に見られる。繁殖期のオス(写真)は、胸鰭や下顎を中心に体の下側に赤い色を呈する。



ギンブナ (学名: *Carassius auratus langsdorffii*)

河川の中流域やため池などに広く生息する。長野川では河口付近から長糸区付近まで普通に見られる。ギンブナは単為生殖(メスだけで子孫を残す)を行うことでも知られる。川で見られる個体のほとんどはメスである。また、私たちに身近な飼育種である金魚の祖先でもある。



オオキンブナ (学名: *Carassius auratus buergeri*)

ギンブナに比べると、体高がやや低く大型になるとされる。河川中下流域の流れの緩やかな環境を好み、長野川では中流部の比較的大きな淵に時々見られる。なお、本種を含むフナ類の分類については詳しくわかっていないことも多い。



イトモロコ (学名: *Squalidus gracilis gracilis*)

河川の中流域で流れの緩やかな環境を好み、河床近くを群をなして泳ぎ回る。目は大きく、吻は近縁種のタモロコ等と比べるととがっている。口ひげは長く、瞳の直径より長い。長野川では中流部のよどみやワンド等に生息している。



タモロコ (学名: *Gnathopogon elongatus elongatus*)

河川中下流のわんどやタマリ、ため池など流れの緩い環境を好む。イトモロコに比べると吻が丸く、頭から尾びれにかけて明瞭な縦縞模様が確認できる。なお、本種の在来分布は本州西部山口県までとされており、長野川を含む九州における分布は国内移入（九州では外来種の扱い）である。



カマツカ (学名：Pseudogobio esocinus)

河川の中流域の砂底に生息する。長野川では河口付近から長糸区付近まで広く分布している。体は細長く、吻は長くとがり口は下を向いている。よく砂に潜るため眼は高い位置にある。流線形の体形が特徴的で、新幹線 N700 系とよく似たフォルムをしている。”カワギス”とも呼ばれ、身は淡白で美味しい。



コイ (学名：Cyprinus carpio)

大食漢として知られ、大きいものでは体長が1mを超える。現在日本国内で確認されるコイのほとんどは中国大陸原産の外来種であることが明らかとなっている。長野川でも中流から下流の淵などで広く確認できる。雑食性でなんでもたくさん食べてしまうことから、在来の生態系への影響が懸念されている。世界の侵略的外来種ワースト 100 (IUCN) にも掲載されている。



ウグイ (学名：Tribolodon hakonensis)

河川の上流域から河口まで広く分布する。九州北部の個体群は海に下ることが知られ、繁殖期の春に出水にあわせて川を上る。長野川では他の魚種に比べると見かけることはまれである。写真は幼魚で河口に近い地点で採捕された個体。成魚はもっと黒っぽく、繁殖期には下方頭部から腹部にかけて赤い筋がでる。



アユ (学名：Plecoglossus altivelis altivelis)

両側回遊魚の代表的な魚で、釣りや食用としての人気も高い。河川の中流域～下流域の流れのある環境に生息する。長野川では河口から長糸校区あたりまで確認され、分布範囲は広いと思われる。一方で、長野川の沿川住民からは、昔に比べると非常に少なくなったとの声も聞かれる。



ニホンウナギ（学名：Anguilla japonica）

いわずと知れた美味しい魚で食用としての人気も高い。しかし、乱獲や河川環境の劣化に伴い、分布域や個体数は減少しており、絶滅危惧種（環境省レッドリスト絶滅危惧IB）に指定されている。長野川では中流部から下流部にかけて広く分布している。※写真の個体は採捕して陸に上げた直後に撮影。



ナマズ（学名：Silurus asotus）

魚に興味がない人でも知っているとても有名な魚。成魚はひげが4本（2対）あり、特徴的な愛嬌ある顔をしている。なお、稚魚にはひげが6本（3対）ある。愛嬌ある顔に似合わず、肉食で大食漢であり、大きいものは60 cm程度になる。長野川では中流部から下流部にかけて広く分布している。全国的には河川環境の劣化に伴い、数を減らしている。



ヤマトシマドジョウ（学名：Cobitis matsubarae）

河川の中流域で流れが緩やかな砂礫底に生息する。岸際の植生が豊富で、水質が良好な環境を好むとされる。九州と山口県のみ分布し、絶滅危惧種（環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類）に指定されている。長野川では中流部を中心に広く分布しており、長野川は県内でも指折りの本種の生息場所の一つである。右下の写真は九州大学の調査において、約1平米あたりで採捕されたヤマトシマドジョウ。長野川が本種にとって非常に良好であることがうかがえる。



トウヨシノボリ (学名：Rhinogobius sp. OR)

河川の中流域の流れのある環境に生息する。長野川では比較的流れの速い瀬などで多くみられる。名前「トウヨシノボリ」の「トウ」は、漢字で「橙」であり、繁殖期の雄（写真）の尾びれが橙色を呈することに由来する。



シマヨシノボリ (学名：Rhinogobius nagoyae)

河川の中流域～下流域の流れのある環境に生息する。長野川では比較的流れの速い瀬などで多くみられ、近縁種のトウヨシノボリと比較すると下流側に多い。上記のトウヨシノボリと同所的に採捕されることも多いが、本種は頬や尾びれに縞模様があることから、比較的容易に判別できる。



ドンコ（学名：Odontobutis obscura）

河川の中流域やため池などに広く生息し、比較的流れの緩やかな環境を好み、水際の植生や礫の間などに潜んでいることが多い。長野川では上流部から下流部まで普通に見られる。肉食で非常に貪欲で、自分と同じくらいの大きさの獲物でも口に入るサイズであれば襲い掛かって捕食する。



ミナミメダカ（学名：Oryzias latipes）

本種は日本人にとって古くから馴染み深い魚の一つであるが、生息環境の劣化等の要因で数を減らし、現在は絶滅危惧種（環境省カテゴリ絶滅危惧Ⅱ類）にも指定されている。河川や水路等の流れのない浅い環境を好み、群れを形成して活動する。長野川では中流部～下流部のワンドや水際の上よみなどで確認される。



モクズガニ（学名：Eriocheir japonica）

河川の上流域から河口まで広く生息し、産卵のため海に下り、生まれた個体は遡上しながら成長するという生活史を持つ。長野川では上流部から下流部まで水際の植生帯や礫などの隙間に普通に見られる。ハサミには濃い毛が生えているのが大きな特徴であり、その名の由来ともされる。食用としても需要が高く、水産資源としても重用されている。



ミナミテナガエビ (学名: *Macrobrachium formosense*)

河川の中流域から河口まで広く生息する。長野川では中流部から下流部まで水際の植生帯などに普通にみられる。その名の通り、とても鋏脚が長く発達していることが特徴である。河口の汽水域には、近縁種テナガエビ (*Macrobrachium nipponense*) が分布する。